

私と超音波医学

黒肱敏彦

昭南病院

思い起こせば29年前、昭和56年の春何とか国家試験を通過して、医師免許証を頂戴し久留米大学第一外科に入局し外科医としての人生を歩み始めて以来長い間超音波にはお世話になりっぱなしであります。なんと感謝申し上げたらよいのか言葉が見つからないほどです。入局3年目の秋2度の学外病院での研修の後帰学したおり、同じ臨床グループに配属になったご縁で現福岡大学消化器外科教授の山下裕一先生に超音波検査の入門指導を受けました。其の後の山下先生との長いお付き合いの始まりです。2年後、先生はデンマークへ国費留学なさることになり、事のついでに小生は国立がんセンター中央病院での肝臓外科研修に出ることとなりました。ここで長谷川先生、幕内先生との出会いがありました。「肝外科やるなら超音波をしっかりと学んで来い」と生理検査室へ1月放り込まれ、ここで内科の吉田先生、放射線科の松江先生(実質的には技師の岩下先生他)にみっちり手ほどきを受けました。肝臓外科では主に幕内先生の患者さんを担当し術中の超音波検査では手術記事の記載時に肝内の3次分枝まで正確に記載するように厳しくご指導いただきました。幕内先生の要求は高度なものでしたので、小生のようなノータリンに取りましては四苦八苦の毎日でした。しかしこの時期日本最初のカラードプラ試作機の術中試験使用にもお仲間に入れていただきその後の小生の仕事の礎となったと信じております。又同時に超音波メスの試作にも横から加えて頂き設計製作の過程の多くを学ばせていただきました。この研修に於ける経験は小生のような田舎者に取りましては大変貴重な経験でありました。しかし帰学してみますと診断装置も超音波メスも何も無く、小生の如き駆け出しに予算も無く払い下げやメーカー諸兄のご尽力により何とかしのいでおりました。挙句の果ては「お前みたいな者に何がわかるか」などといわれる始末でした。「がんセンターでは僕の所見は信頼していただけていたのに」と落ち込んで、我慢と苦闘の日々とでも申しましょうか?しかし、ここで、又、町淳二先生が何故かイリノイ大学から久留米大学第一外科においでになり町先生と山下先生と3人で術中を中心に外科的超音波の応用についての仕事を始めることができました。小生は何の力も無かったのですが人との出会いに恵まれて充実した日々でした。日超医への活発な活動もこの頃が最初で最高に活発でした。ちょうど時流にも乗りイケイケの頃でしたでしょうか。多くのメーカーの方々のお付き合いの始まりもこの頃でした。その中で山下、町両先生方とこれからは、カラードプラ、造影エコー、組織特性がトピックであると狙いを定めました。又、カラードプラの演題をポスターシンポジウムという場に出し、けちゃんけちゃんにけなされた時に励ましていただいたのが伊東紘一先生でした。伊東先生が山下先生のお師匠であられると知ったのもこの時でした。それにしてもあの頃私の発表をけなしまくった方々が、そ知らぬ顔でその後これからはカラードプラの時代であるなどと宣はれるのを複雑な思いで聞いておりましたことが思い出されます。造影の実験では人工血液なるものを探し出し使ってみると実験動物が皆死んでしまって実験にならなかったことも懐かしい思い出です。その後町先生が米国に戻られDr. Sigelの元で活動されるに際し小生もお仲間に加えていただきました。このときは組織特性の実験で目的したが、当時最新のQuantumのQAD 1という装置にめぐり合えました。貧乏な研究室でしたし、留学先はDept of Surgeryでしたのが、当時の米国では外科医に超音波に対する理解が低くDr. Sigelの指令で血管吻合や胆道の術中超音波を行って学内及び米国内での理解が得られるように活動を致しました。実際1997年のアメリカ外科学会では外科と超音波が大きな話題となりました。それに先んじてヨーロッパでは外科系レジデントプログラムに超音波が組み込まれていました。この流れでそれまで軽んじられていた外科における超音波の存在が確固たるものとして認められ現在に至っています。因みに町先生は外科の超音波指導医の育成プログラムの中心となってお活躍でした。レジデントの講義も数回させていただきました。今思えばあの訴訟社会の米国の手術室でしかも手洗いをしして術中検査を免許も何も無い小生が1年間行ってそれなりの成果を上げられたのは一重にDr. Sigelの人徳とお力によるものと心から感謝しています。今だから言えるというエピソードには事欠きません。実験もしましたが、グラント取得のため弾性ストッキングの会社

と手を組み貸し静脈血栓の実験を行い見事にNIHの大きなグラントを取ることができました。日本消化器外科学会にカラードブラの演題を米国から出して不採用となった折、「Toshi査読者は君より知識が無くこの意味が解らなかつただけだ、科学の進歩の過程ではよく起こる現象だから気にするな。」とおっしゃってくださいました。実際その後カラードブラが少し世間に広まってから改めて、消化器外科学会のパネルに応募し採択され、学会当日発表時の会場に人があふれていました。先生の予言通りでありました。又、この血栓のお仕事の際に血栓形成における物質についての生化学的な研究で新たな留学のシートを後輩のために得ることが出来さらに其の担当である生化学者のDr.Tsuzynskyとこの後長い進进行を結ぶことができ且つ又、この研究で幾人もの後輩たちが学位をとることができました。加えて生化学教室に小生の大学から別個に研究者の養成を戴きました。光栄の限りでありました。一方、この時期米国のレジデント制度に基礎医学を学ぶことが組み込まれ始め多くのレジデントが私たちの研究室で机を並べ時を同じくしたのも懐かしい思い出です。年季が明けて日本に帰る時になってChairmanから「何故帰るのか役に立つやつは残れば良いのに」と引き止められたときにはそれまでのこともあり大変うれしく思った記憶があります。さらにこの時に小生の後をつぐ後輩達のために小生は無給でしたので幾漠かのお手当てを頂きたくお願いにあがったのですが何とも厚かましいことをしたものです。しかし神のおかげか、実際お手当てをいただけるようになり、信じられないほどの嬉しさでした。日本に帰国しますと平成元年の12月でしたが、又、教室内のやっかみというサイトカインの洗礼を受けました。この頃は小生もかなり強かで少々政治力も出来てきておりましたのでどうにかかりました。さてどんな仕事をと考えておりますと、当時は病院長特別予算というのがありこれをうまく丸め込んでQAD2000を購入し術中カラードブラを中心にいろいろな仕事をさせていただきました。当時各社カラードブラの装置をお造りになりますと小生の元へ持参いただきQAD2000との比較をした上で最終調整して市場へ出されていたように記憶しております。派手な時期でした。しかし人間幸せな時間は長く続かないもので、教室内の政争のあおりで大学を去ることになりました。捨てる神あれば拾う神ありで大学の門前町にありまます古賀病院に勤務し実地医家としての活動をさせていただきました。この時期は古賀病院の超音波検査室の充実と技師さんの育成にエネルギーを費やしました。技師さんたちは意欲を持ってよく頑張ってくださいました。手術もガン末期患者さんのお世話もたくさんさせていただきました。充実の日々でした。ここでまたまた、神の思し召しか何でしょうか、古賀病院入職後に3台のAccuson Sequoiaを購入していただきソナゾイドによる造影に日常の検査に大いに活用させていただきました。この当時の古賀病院の超音波検査室は史上最強のチームであったと信じて疑いません。この頃を境に世界の経済状況に変化が生じ、加えて医療崩壊が叫ばれるようになり小生の興味が、傾いた医療機関の建て直しの方へ向かい始めました。まあなんと申しますか、人としてなすべきことは何かなどと気取ったことを考え始めたのでありましようか？その挙句現在は鹿児島の中のエアーポケットとも言うべき鹿児島県曾於市大隅町にありまます昭南病院という153床の過疎地の病院に副院長として勤務しております。至る所でいろいろなことを学ばせていただきましたが、要所要所ですばらしい人や装置などとの出会いがありました。天に神にそして諸先輩方に感謝するばかりです。そして其の出会いの基礎になったのが超音波医学であったと考えています。今地方へ着任してみても超音波のみならず受けるべき医学的恩恵をきちんと享受なさっておられない状況を悲しく思っています。特に医師の超音波への理解の浅さに落胆します。そこで、今の病院でも赴任4年にしてやっと技師養成の第一歩を踏み出しました。超音波による利益を一人でも多くの地域の人たちに行き渡るように尽力できればと日々考えております。今まで小生をお導き頂いた諸先生方、技師の皆様、メーカーの方々に深謝しつつ思い出と共に筆を置かせていただきます。